

A I 部

主格， を格

A I 部では「主格」と「を格」について考える。いずれも動詞にとって非常に重要な格なので、元来は格表示する必要のなかった格であり、現在でも表示されないことも多い。この重要な格についてはどんなことを考える必要があるのだろうか。

A1章では、主格に3基本主格(\emptyset_1 , ガ₁, ガ₂)があることを確認し、12機能主格が見いだされることを述べる。

A2章では、「を」は元来感動詞であったが、間投詞として文中に入り、結果、基本イメージ内の(第1主格主体以外の)必須実体を1つ表示する格詞であるかのような様相を呈するに至った。これについて論じる。

A 1 章

主格の下位分類

A1.1 3 基本主格, 12機能主格

日本語構造伝達文法では主格を下位分類すべきものとして考えている。

主格は、人間の判断の形式的側面からみれば3つの「基本主格」に分類することができ、また日本語の単主体、複主体構造の側面からみれば12の「機能主格」に分類することができる。前者「基本主格」は人間の言語に普遍的なものであると考えられる一方、後者「機能主格」は日本語の特質から導かれる日本語的性格の強いものであると考えられる。

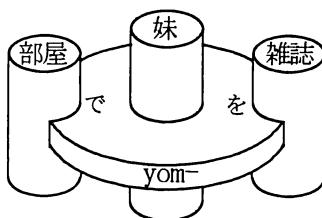
A1.2 主格は属性の円盤の中央に位置をとる

まず、「文法」での「格・主格・客格」の定義・扱い方を確認することから始めたい。

例えば、

A1-1> 妹が部屋で雑誌を読む。

という文には「妹・部屋・雑誌」という3つの名詞があり、「読む」という動詞がある。この文を構造モデルで示せば、図A1-1 のようになる。



図A1-1 妹が部屋で雑誌を読む

A1章　主格の下位分類

名詞は「実体」と呼ばれる円柱で示され、動詞は「属性」と呼ばれる円盤によって示される(『文法』1.2)。

「妹」は属性「読む」に対して「主格」にあり、「部屋・雑誌」は非主格にある。構造モデルにおいては、主格実体(妹)は属性の円盤(読む)の中央に位置をとる。これに対して「で格」にある実体(部屋)や、「を格」にある実体(雑誌)……つまり非主格にある実体……は属性の円盤の周辺に位置をとる(『文法』2.1～2.3)。

「妹」のように「主格」に立つ実体を「主体」と呼び、「部屋・雑誌」のように主格以外の格に立つ実体を「客体」と呼ぶ。主格以外の格を「客格」と呼ぶ(『文法』1.2)。

「文法」では、「格」を「実体と属性の論理関係」であると考えており、「主格」を「ある実体がそこに現れた属性の持ち主であることを示す格」であるととらえている(『文法』2.1及び2.2)。日本語の「主格」は格詞「が」で表示することができる。

主格は属性の盤の中央に位置をとることを確認したが、次にこの主格が2つの側面から下位分類できることについて述べる。

A1.3 なぜ主格を分類する必要があるのか

日本語の主格は

- ア) 「人間の判断の形式的・普遍的側面」
- イ) 「日本語の单主体構造・複主体構造の側面」

の両側面から下位分類できる。

ア) 人間の判断の形式的・普遍的側面から

人間の判断には主体と属性の設定順という要素がある。この設定順の相違が表層文においてニュアンスの異なる主語を生む。例えば「私、学生です」「私が学生です」「いま私が調べていますから……」のように、異なるニュアンスの主語「私」のあり方がある。ここに見られる相違について説明する

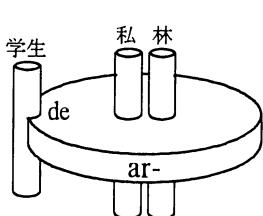
ためには、主格のあり方を原理的に分類しなければならない。これについては次節(A1.4)において扱う。(なお、主格実体が文の中に現れて「主語」となったときの主語としてのあり方は、「は」の使用とあいまって、8種類のものとして現象する。『文法』3.4)

イ) 日本語の単主体構造・複主体構造の側面から

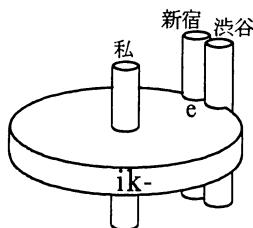
例えば

A1-2> 私と林さんが学生である。(図A1-2)

という文は「私が学生である」という文と「林さんが学生である」という文が「と」により1文にまとめられたものと考えられ、「私」と「林さん」の両者が主格にあるものと考えられる。構造形式の上からは、同一の主格に複数の実体(主体)が立ったものと考えられる。



図A1-2 私と林さんが学生である



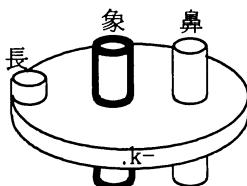
図A1-3 新宿や渋谷へ行く

この「と」、そしてさらに「に・や」は同じ格にある名詞を結んで名詞句(「私と林さん」)を作る機能がある。(「と・に・や」が同じ格にある複数の実体(名詞)を結ぶことについては『文法』19.3 [特徴7] ③参照。)

このことは主格ばかりでなく、客格でも同様であり、「カレンダーに手帳を買った」「新宿や渋谷へ行く」(図A1-3)では、「に・や」がそれぞれ「を格」「へ格」の同一の格にある複数の実体(名詞)を結んでいる。

それでは、「象が鼻が長い」(図A1-4、ふつう「象は鼻が長い」と描写する)では、「象」も「鼻」も主格にあると考えられるのに、なぜ「象と鼻が長い」と言い換えられないのだろうか。「象」も「鼻」も同一格にあるので

はないだろうか。



図A1-4 象が鼻が長い

同様に「彼女が旅行が好きだ」はなぜ「彼女に旅行が好きだ」と言い換えられないのだろうか。「彼がロシア語が分かる」「彼がお金が要る」では、なぜ「彼やロシア語が分かる」「彼とお金が要る」と言い換えられないのだろうか。

これはつまり、同じように「が」で表示される主格ではあっても、複主語の場合はまったく同じ主格であるわけではない、ということを意味している。「私と林さんが学生である」の場合は「私・林さん」の両実体がまったく同一の主格に立っていると考えられるのに対して、「象は鼻が長い」の「象・鼻」の両実体はまったく同一の主格に立っているわけではない、と考えざるを得ない。

複主体構造というものを観察することによって、主格には異なる主格があることが分かる。日本語の主格は主格群なのであって、主格にはさらに下位区分がある。

主格を分類する必要性はここにある。

A1.4 判断の形式的側面から原理的に導かれる3分類……基本3主格

まず、上記のア)について述べる。これはすでに『文法』第2章において明らかにされたことであるが、主格には基本的に3種類のものがある。主体と属性が結びつく際に、主体と属性のどちらが先に設定されるか(どちらが論理的に先に決定されるか)という、設定の先後関係が生じ、この設定の先後関係のあり方が3通りあることから、主格として3種類('01格','が1格','が2格')が認められることになるのである。

基本3主格（『文法』2.2より再掲）

1) 第1主格(θ1格)……主体の設定が属性の設定に先立つ格

主体のもつ多様な属性から一つを選び出す判断での格。

その主体そのものに関心があって、その主体について述べる。

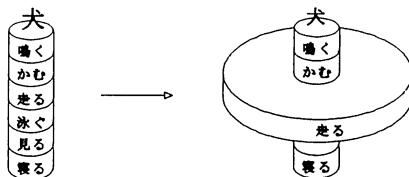


図2-1 犬 θ1走る。

2) 第2主格(が1格)……主体の設定が属性の設定と同時である格

主体と属性がはじめから結びついている判断での格。

主体と属性の結びつきそのものに関心があり、状況について述べる。（眼前描写、従属節形成）

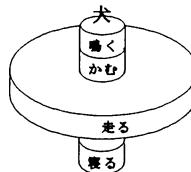


図2-2 ほら、犬が1走る。／犬が1走るのが1見える。

3) 第3主格(が2格)……主体の設定が属性の設定より遅れる格

属性を構成する多様な主体から一つを選び出す判断での格。

まず属性の方が決定されて、後から主体が選択決定される。

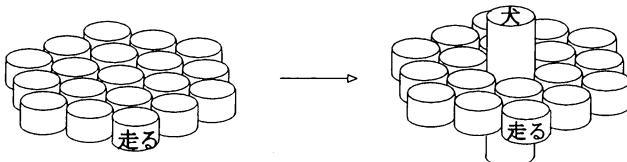


図2-3 (例：何が走るか、という問い合わせに対する回答) 犬が2走る。

A1章　主格の下位分類

この基本3主格に関し、前ページ枠内に『文法』から該当部分を図とともに引用した。ここに引用した主格の3分類は、次の表A1-1のようにまとめることができる。

基本3主格

表A1-1

構造形式との関係	分類	分類の基準 主体と属性の設定順序	主格の下位分類 (名称)
全構造形式に共通		主体の設定が先	第1主格／ \emptyset_1 格
		主体と属性の設定が同時	第2主格／が ₁ 格
		属性の設定が先	第3主格／が ₂ 格

この主格の3通りのあり方は、人間の判断の形式的側面からみて極めて原理的、基本的なものであるので、おそらく、ほとんどの人間の言語に共通するあり方であろうと思われる。ただし、言語はこの3主格に対して必ず3通りの表層形式を準備しているというわけのものではない。表A1-1に見るよに、現代日本語では「 \emptyset 」に第1主格を、「が」に第2、第3主格を分担させるという形で、2つの表層形式でまかなっている。

なお、「象は鼻が長い」では、「象」が第1主格(\emptyset_1 格)に立ち、これに「は」が作用している。このことを「象 \emptyset_1 は鼻が長い」のように表示する(『文法』19.1)。

A1.5　主格を複主体構造との関わりで分類する……12機能主格

次に、A1.3のイ)について述べる。本節では前節(A1.4)で示した分類とは異なる側面からの新たな分類を試みる。単主体構造・複主体構造の中での、主格の機能という側面からの分類である。

日本語では、「主格」は1つの属性に対して「单一主格」「複主格」のあり方がある。「複主格」については『文法』の特に第19章～第21章、第38章において論じた。本章ではそれらの主格を機能による分類という形で整理し、主格のあり方の全容が把握できる視点を提示したい。

A I 部 主格, を格

結論から言えば、表A1-2 のように12の機能主格に分類できる。それらの機能主格は構造形式のあり方に依存している。「基本3主格」の方は、構造形式のあり方がどのようにであれ、主格のあるところでは基本的に常に成立する。「12機能主格」は、「構造形式のあり方に依存する」という点でも「基本3主格」と異なっている。

12機能主格

表A1-2

構造形式との関係	構造分類	属性と主体	機能による分類	
構 造 形 式 に 依 存 す る 主 格	単主体構造	A	1 属性に 1 主体が立つ	(無標)主格 1
		B	1 属性に複主体	感覚主格 2 帯感主格 3
	複主体構造	C	単位構造が属性 (結果的に複主体)	本主格 4 属性主格 5
		D	動・態各属性に主体 (結果的に複主体)	行為主格 6 態主格 7
	E	-テアルの目的語が主体 (結果的に複主体)	テ主格 8 対テ主格 9	
		F	属性実現の時場が主体 (結果的に複主体)	時場主格 10 (他の機能主格) 11
	G	主体と数量主体の置換 (時差をおく複主体)	時差主格 11 数量主格 12	

この 表A1-2 では構造形式を A～G の 7 種に分けている。

Aは「単主体構造」

Bは「1属性に複主体が立つ複主体構造」

Cは「単位構造が属性となる複主体構造」

Dは「態複主体構造」

Eは「～テアル複主体構造」

Fは「時場複主体構造」

Gは「数量複主体構造」（「時差複主体構造」）

1.6 構造分類

それでは、この12機能主格のそれぞれがどのようなものであるのかについて検討してみる。

[A] 単主体構造（主格1）

例えば

A1-3> 彼 \emptyset_1 はギターを弾きます。 (図A1-5)

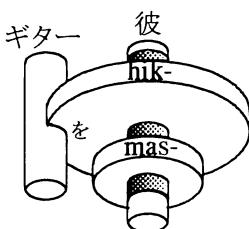
の構造では1つの属性(hik-)に対して1つの主体(彼)が立つだけである。1つの属性に1つの主体が立つことを示す機能をもつ主格を最も典型的な主格と考え、「主格1」とし、この主格を無標の主格として扱い、「主格」あるいは「(無標)主格」と表示する。

図A1-5では「ギター」は客体、mas-は助動詞(『文法』10.2)である。主語「彼」に巻き付いているリボンは「は」を表している(『文法』3.1 ③)。この「は」を表すリボンは特に構造上に表示しなくともよいので、本章では以後「は」を使用する場合でも構造上にこのリボンを示すことはしない。

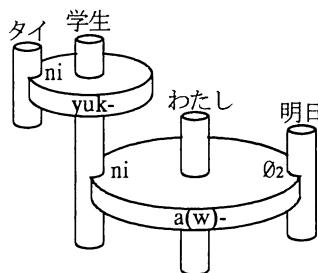
図A1-6は

A1-4> わたし \emptyset_1 はタイに行く学生に明日 \emptyset_2 会う。

という表層文の構造である。ここには属性が2つある(「yuk-」「a(w)-」)が、属性に関係している主語はそれぞれ1つである(「学生」「わたし」)。したがってここに存在する主格はとともに「主格1」であり「(無標)主格」である。



図A1-5 彼はギターをhik-i=mas-



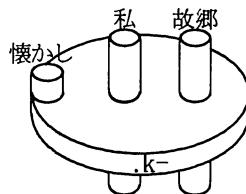
図A1-6 タイにyuk-u学生に明日a(w)-

A I 部 主格, を格

[B] 同一属性に複主体が立つ構造（主格2, 3）

A1-5> 私₀₁は故郷が懐かしい。 (図A1-7)

という文の構造では1つの属性「懐かしい」の上に「私・故郷」の2実体がともに主体として立っている。(構造モデル上で形容詞の表し方については『文法』8.1 参照)



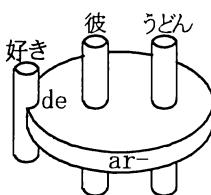
図A1-7 私₀₁は故郷が懐かし.k-

「懐かしい」という意味的には感覚的な属性に対して、「私」は「それを感じる」という形でその属性を直接に保持する主体となっており、「故郷」は「私」の感覚の中で「その感じを帶びている」という形でその属性を直接に保持する主体となっている。両者ともに主体である。そこで、「私」の方を「感覚主体」と呼び、「故郷」の方を「帯感主体」と呼ぶ(『文法』20.2)。

「感覚主体」であることを示す機能を持つ主格を「感覚主格」とし、これを「主格2」とする。「帯感主体」を示す機能を持つ主格を「帯感主格」とし、これを「主格3」とする。

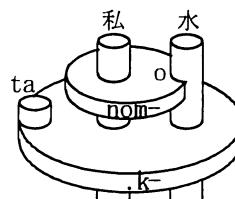
A1-6> 彼₀₁はうどんが好きだ。 (図A1-8)

A1-7> 私₀₁は水が飲みたい。 (図A1-9)



図A1-8 彼₀₁はうどんが好き-d=a- 図A1-9 私₀₁は水が nom-i=ta.k-

の構造でも同様で、「彼・私」の立つ格が「感覚主格」であり、「うどん・

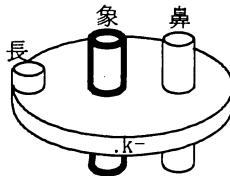


水」の立つ格が「帶感主格」である。（「好きだ」の構造については『文法』20.3を、「飲みたい」の構造については『文法』21.2を参照）

[C] 単位構造が属性となる構造……結果的に複主体を構成（主格4, 5）

A1-8> 象 \emptyset_1 は鼻が長い。 (図A1-10)

この構造では「象」という主体が「長い」という属性ではなく「鼻が長い」という単位的な構造全体を属性として持っている形になっている（『文法』19.2）。



図A1-10 象 \emptyset_1 は鼻がnaga. k-

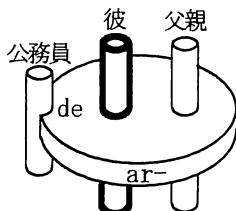
また、

A1-9> 彼 \emptyset_1 は父親が公務員である。 (図A1-11)

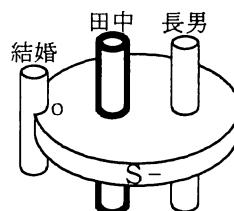
の場合は、主体「彼」が「父親が公務員である」という単位構造を属性としており、

A1-10> 田中さん \emptyset_1 は長男が結婚する。 (図A1-12)

の場合も主体「田中さん」が「長男が結婚する」という単位構造を属性としている。「彼」が「公務員である」わけではないし、「田中さん」その人が「結婚する」わけではない。



図A1-11 彼 \emptyset_1 は父親が公務員-de=ar-



図A1-12 田中さん \emptyset_1 は長男が結婚=S-

いずれの場合も、結果的には1つの属性に2つの主体が立つことになり、

A I 部 主格, を格

複主体の構造形式となる。このような場合、「象・彼・田中」に当たる主体を「本主体」と呼び、「鼻・父親・長男」に当たる主体を「属性としての単位構造の中での主体」であるという意味で「属性主体」と呼ぶ(『文法』19.2)。

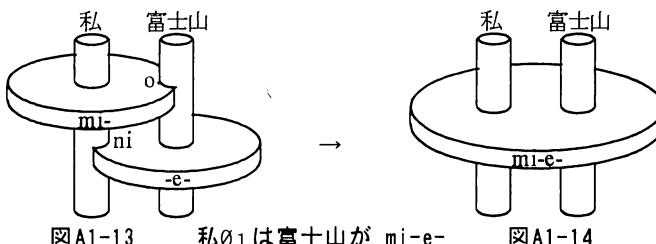
「本主体」であることを示す機能を持つ主格を「本主格」とし、これを「主格4」とする。「属性主体」を示す機能を持つ主格を「属性主格」とし、これを「主格5」とする。

なお、この「単位構造が属性となる構造」に8つの特徴があることが『文法』19.3において論じられている。

[D] 態複主体構造（主格6, 7）

A1-11> 私_{ø1}は富士山が見える。 (図A1-13, -14)

の構造(図A1-13)では「-e-」という許容態属性が使用されている。(許容態については『文法』12.4 参照。)



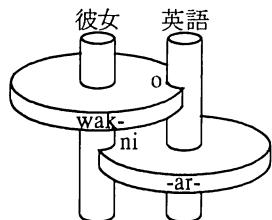
この構造で「見る」を属性として持つのは主体「私」であり、主体「私」が「富士山を見る」という属性と結びつくことを許容主体「富士山」が許容している。この許容態属性「-e-」から可能の意味が生じる。

「見える(mi-e-)」という形式はあたかも1つの属性であるかのような扱いをされることもあり、その場合には図A1-14のような構造としてとらえられ、結果的に複主体構造が形成される。(しかし、図A1-14の構造にしてしまうと「私には富士山が見える」のような、行為をする主体<私>を「に格」で描写することはできなくなる。)

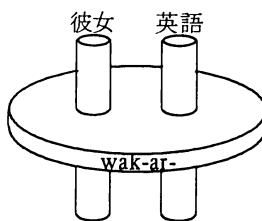
このような、態属性に起因する複主体を「態複主体構造」と呼ぶことにする。この構造には「行為主体」(私)と「態主体」(富士山)が存在し、前者を示す機能を持つ格を「行為主格」「主格6」、後者を示す機能を持つ格を「態主格」「主格7」と呼ぶ。

A1-12> 彼女 θ_1 は英語が分かる。 (図A1-15, -16)

においては「彼女」が行為主格にあり、「英語」が態主格にある。(この1語「分かる」の中に存在する受動態については『文法』12.3 参照)

図A1-15 彼女 θ_1 は英語が wak-ni

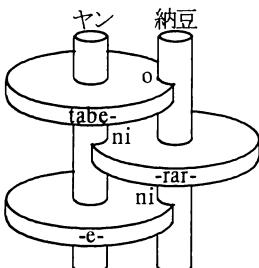
→



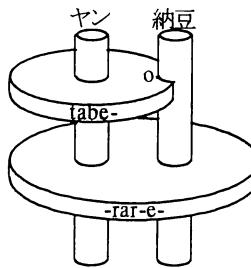
図A1-16

A1-13> ヤンさん θ_1 は納豆が食べられる。 (図A1-17, -18)

の場合は「ヤンさん」は(tabe-に対する)行為主格と(-e-に対する)態主格(許容態)の両方にある。「納豆」は(-rar-に対する)態主格(受動態)にある。

図A1-17 ヤンさん θ_1 は納豆が tabe-rar-e-

→



図A1-18

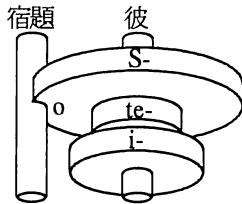
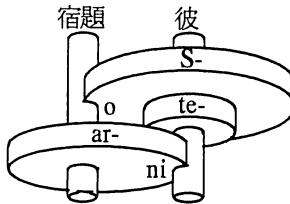
(「られる」形式が可能表現として機能する構造については『文法』12.5.3) 参照)

wak-ar- や -rar-e- のように態属性が動属性や他の態属性と一体化するのは「接合力」による(A17.1 ⑤)。

[E] ~テアル複主体構造(主格8, 9)

A1-14> 彼 \emptyset_1 は宿題をしている。 (図A1-19)

においては「彼」が i-を持ち、「存在の主体」となっている。「存在の主体」を「宿題」の方に移せば、主体となる「宿題」は ar-をとることになり、「(彼には)宿題がしてある」となる(図A1-20)。

図A1-19 彼 \emptyset_1 は宿題をしている

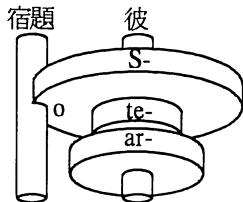
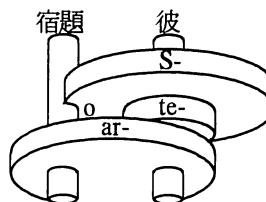
図A1-20 (彼には)宿題がしてある

(「宿題」がここで i-をとらないことについては『文法』第18章参照)

また、もとの「彼 \emptyset_1 は宿題をしている」(図A1-19)の文に「準備完了」のニュアンスを持たせようとする場合には、-i を ar- に替えて

A1-15> 彼 \emptyset_1 は宿題をしてある。 (図A1-21)

のようにすることになる(『文法』18.3.3)②)。

図A1-21 彼 \emptyset_1 は宿題をしてある図A1-22 彼 \emptyset_1 は宿題がしてある

すると、この ar-(図A1-21)と、図A1-20で「宿題」が主体として持っている属性 ar- とが合一化する現象が生じることになる(図A1-22)。その場合には複主体が生じることになり、描写文は

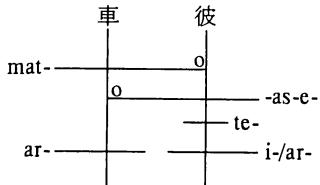
A1-16> 彼 \emptyset_1 は宿題がしてある。 (彼が宿題がしてある。)
となる。

同様の例は、図A1-23, -24のような使役態の場合にも生じる。

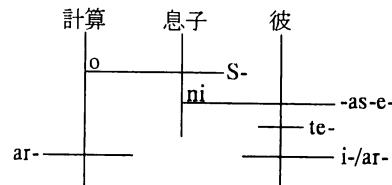
A1章 主格の下位分類

「彼 θ_1 は車が待たせてある」

「彼 θ_1 は息子に計算がさせてある」



図A1-23 彼 θ_1 は車が待たせてある



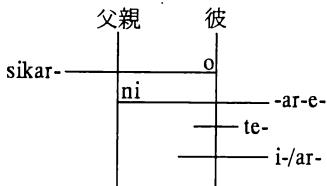
図A1-24 彼 θ_1 は息子に計算がさせてある

ただし、この現象はヲ格の実体に生じ、図A1-24, -25を見るように、思想性を持つニ格の実体には生じないようだ、

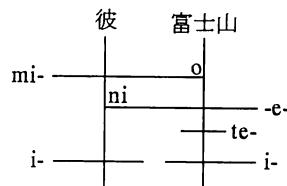
「*彼 θ_1 は息子が計算をさせてある。」

「*彼 θ_1 は父親がしかられている」

という描写はできない。



図A1-25 彼 θ_1 は父親にしかられている



図A1-26 彼 θ_1 は富士山が見えている

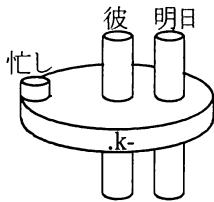
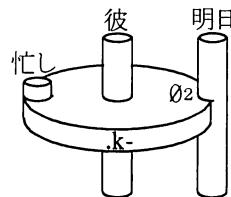
図A1-26は参考までに掲げるもので、この場合は「彼」はニ格にあるけれども、「彼」も「富士山」もガ格、主格にあり、複主語になるので、i- の合一化を生じ、「彼 θ_1 は富士山が見えている」が可能となっている。（「富士山」が i- を持つのは -e- を持っているからである（『文法』第18章）。また、「富士山」は態主格なのでD 7主格でもある。）

以上のように「<宿題をする>彼」にあたる実体は構造において =te- 属性を持つので「テ主体」と呼び、その格を「テ主格」、主格 8 とする。一方、「～テアル」構造内のヲ格実体が ar- をとて存在の主体となる場合、これを「対テ主体」と呼び、その立つ格を「対テ主格」、主格 9 とする。

[F] 時場主体のある構造……結果的に複主体を構成（主格10）

A1-17> 彼 \emptyset_1 は明日が忙しい。 (図A1-27)

の構造では、「明日」という「時」が「彼が忙しい」という属性を持つものとなっている。

図A1-27 彼 \emptyset_1 は明日が isogasi.k-図A1-28 彼 \emptyset_1 は明日∅₂ isogasi.k-

この構造は図A1-28 の

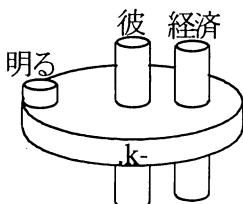
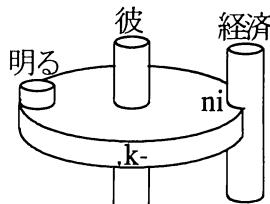
A1-18> 彼 \emptyset_1 は明日∅₂忙しい。

の単主体構造(A構造)が本来的なものであり、「明日」は時の格(∅₂格, 『文法』2.7)に立つのが普通である。ところが、属性が状態性である場合に「時」を表す実体がその「状態」の持ち主・主体と感じられることがあり、その場合に結果的に図A1-27のような複主体構造となる。

同じように、構造の成立する「場」を示す実体が主体となることもある。

A1-19> 彼 \emptyset_1 は経済が明るい。 (図A1-29)

の構造の場合、「明るい(よく知っている)」のは「彼」である。「経済」は「彼が明るい」の成立する「場」なので、「経済」は本来「に格」にある(図A1-30)。

A1-20> 彼は経済に明るい。図A1-29 彼 \emptyset_1 は経済が akaru.k-図A1-30 彼 \emptyset_1 は経済に akaru.k-

属性「akaru. k-」が状態性であるので、成立の場である実体「経済」がその状態の持ち主であるかのように感じられ、図A1-29のような「経済」を主体とする複主体構造が形成されるのである。

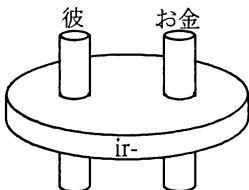
以上のような、構造の成立する「時」ないし「場」を示す実体が、本来立つべき「 \emptyset_2 格・に格」を離れ、主格に立つことになった場合、その実体を「時場主体」と呼ぶことにし、その立つ主格を「時場主格」と呼ぶことにする。「主格10」である。

この「時場主格」はこれのみでは存在することがなく、他の構造形式の存在することが前提となる。他の单主体構造(A)や複主体構造(B～)に付加されて、結果的に複主体構造を形成する。複主体であるもう一方の主体は、他のいづれかの機能主格に立つ(例：「ここが富士山が(よく)見える。」「ここθ₁は富士山が(よく)見える。」主格7)。ここに生じる構造を「時場複主体構造」と呼ぶことにする。

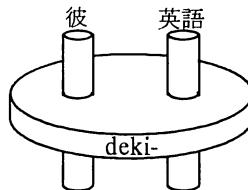
なお、『文法』20.4で「お金が要る」「英語が出来る」各文の「お金・英語」を「語源主格」と呼ぶことを提唱しているが、これらの文では、例えば「彼」という場を示す実体を「に格」に置くことができる。「彼に(は)お金が要る」「彼に(は)英語が出来る」。この「彼」も「時場主格」として機能する。

A1-21> 彼がお金が要る。 (図A1-31)

A1-22> 彼 \emptyset_1 は英語が出来る。 (図A1-32)



図A1-31 彼 \emptyset_1 はお金が要る



図A1-32 彼 \emptyset_1 は英語が出来る

このように、「語源主格」の場合にも「時場主格」が存在する。(「語源主格」そのものは「主格1……(無標)主格」である。)

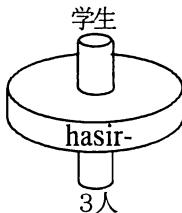
[G] 数量複主体構造（主格11,12）

A1-23> 学生が3人走る。 (図A1-33)

のような文では、名詞(学生)と数量実詞(3人)が同じ格にあると『文法』では考えている。この場合「学生」と「3人」は主格に立っている。

しかし、もしまったく同一の主格であれば「と・に・や」で結ぶことができるはずであるが、「学生や3人走る」などすることはできない。

『文法』(38.2)では、この名詞と数量実詞は時差をとって同一格に立つものとしている。時差をとることを示すために構造図示においては図A1-33のように、実体の上下に異なる実体の名称を置いている。



図A1-33 学生が3人を hasir-/学生を3人が hasir-

基本的に上にあるものが先に、下にあるものが後に、その格位置に置かれる（規則に従って、逆になることもある）。異なる主体が同一属性の上に立つのであるから、これも一種の複主体の構造を形成している。

ここにある主格は位置としては同一格ではあっても、格としては異なることになる。時差同位格である。実体(学生)の立つ格を「時差主格」「主格11」とし、数量実体(3人)の立つ格を「数量主格」「主格12」とする。

主格は原理的に3種類？ → p. 8

日本語の主格は機能の点からみると12種類もある？ → p. 10

「を」はなぜ自動詞にも使用できるのか？ → p. 29

古代には「を」も主格を表した？ → p. 33

A1章　主格の下位分類

A1.7　主格の厳密な表示法

化学では原子番号が同じで、質量数が異なる元素を「同位体」という。同位体は周期律表上で同じ位置を占めており、元素記号では記号の左上にその質量数をつけて区別されている。例えば、炭素の同位体は¹²C、¹³C、¹⁴Cなどのように表される。

主格もこれにならって表示することができるだろう。実際、基本3主格はすでに「θ₁/が₁/が₂」として表示されている。12機能主格の方は「θ¹/θ²/θ³/θ⁴/……」「が¹/が²/が³/が⁴/……」あるいは「θ^A/θ^B/θ^C/……」「が^A/が^B/が^C/……」のように右上に表示できる。実際の主格は基本3主格と12機能主格の組み合わせで認識されることから、「θ₁¹」とか「が₁^A」、「が₂^{D6}」とかのような表示となる。

例えば、図A1-1の「妹が部屋で雑誌を読む」の主体「妹」が立っている主格は「が₁¹」ないし「が₁^A」、「が₁^{A1}」として表示され、図A1-11の「彼θ₁は父親が公務員である」の複主体「彼／父」の立っている主格は、それぞれ「θ₁⁴／が₁⁵」ないし「θ₁^C／が₁^C」、「θ₁^{C4}／が₁^{C5}」のように表示される。

主格は、このように表示することにすれば、より精確な扱いができるようになる。(12×3=36……単純計算では、36通りの区別が可能である。)

A1.8　章のおわりに

以上、主格が人間の判断の形式的・普遍的側面からは3つの基本主格に分類され、また、日本語での機能的側面からは12の機能主格に分類されることが示された。

基本主格は非常に原理的なものであって、3種類であることは恐らく変わることはないと思うが、機能主格の方は日本語的・個別的・歴史的なものであり、今後新たな考察によって分類項目の数に若干の増減が出てくる可能性もある。

今後は、客格の分類の原理を明らかにしていくことも課題となる。

タは開始も表す？

タが「開始」を表す、と言うとびっくりする人がいる。走つタ、疲れタ、寝タ……みな「完了」でしょ、と言う。そこで、

①「子どもが寝タ。静かになった。」

は完了ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。では、

②「子どもが寝テイル。」

は完了後の結果の状態ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。

では、子どもが起きたときに

③「よく寝タね。」

と言うことがあります、これは何ですか。やはり完了ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。

では、「寝る」出来事は2回完了するのですか、と聞くと、そういう、と答えてくれる。初めの寝タ(①)は「開始」の完了を表し、後の寝タ(③)は「終了」の完了を表すのだ、と答えてくれる。

では、「開始」を表すタもあるのですね、と聞くと、そういうことになる、と答えてくれる。じゃあ、なぜびっくりしたのですか……。

* * * *

本文法では、こう考えている。「タ」は絶対・相対の両テンスにおいて左上向きの矢印「↖」で示される。一つひとつの出来事には「開始・進行中(区切り)・完了・結果状態継続中(区切り)・結果状態消滅・記憶継続中／出来事まるごと(非アスペクト)」というアスペクトがある。タの矢印は過去・以前にある出来事のある一つのアスペクトを選んで指し示すのであるから、当然「開始」を選んで指し示すこともある(ただし、開始後のアスペクト[7]として)。その場合にタが過去ないし以前の「開始」を表すことになるわけである。詳しくはA4章参照。

A 2 章

を格

本章においては、日本語の「を格」とは何であるのかについて考察する。

属性(動詞・形容詞等)はそれぞれに基本イメージをもっている。その基本イメージ内には1つないし2つの必須実体が存在する。この必須実体のあり方により、基本イメージは4つの型に分類できる(表A2-2)。

基本イメージを構成する必須実体は、属性との格関係が明白であるので、わざわざ格表示される必要がなかった。

「を」は元来感動詞であったが、間投詞として文中に入り、結果、基本イメージ内の(第1主格主体以外の)必須実体を1つ表示する格詞であるかのような様相を呈するに至った。しかし、必須実体の格はもともと明白なので、「を」は格表示という観点からは無意味な形態であった。現代語でも口語では省略されることが多い。「を」は格を表すのではなく、実体が基本イメージ内の実体であることを示しているにすぎない。これについて論じる。

また、「を格」が重複しない理由についても考える。

A2.1 「を」の示すもの

1) 「を」は何を示すものか

日本語の格詞「を」は

本を読む 服を着る 切符を買う

などのように他動詞の目的語を表すはずのものなのに、なぜ

橋を渡る 街道を行く 空を飛ぶ

家を出る 門を入る 右を向く

A I 部 主格, を格

のように自動詞にも使用されるのか。さらに、なぜ

何をあわてて……(原因・理由) (古語)瀬を早み……(主体)

のような用法があるのか。

格詞「を」はいったい何を示そうとしているものなのだろうか。日本語構造伝達文法では一つの視点を設定してこの疑問に答えようと試みる。

今日、私たちは一般に、格詞「を」は目的格を表すものと考えている。しかし、そう考えるのは現代人の言語意識によってである。上のような目的格表示に限定されない「を」の使用の広がりを検討してみると、「を」は元来何か異なる基準によって使用してきたのではないか、発想が異なっていたのではないか、と疑わずにはいられない。「を」について考えるには、古代人の言語意識、発想に立ち戻ることが必要なのではないだろうか。

2) 格詞は格と1対1に対応しない

なお、格詞については、次のことを議論の前提としておきたい。

格詞は、第1主格詞(θ_1)を除き、格と1対1に対応していない。

格は何万何千もあるが、それを表示する格詞は10前後の数しかない。したがって、上のように、また次のように言うことになる。

格詞は、第1主格詞(θ_1)を除き、(同名)格群を表示する。

当文法でいう「格」とは、属性(動詞・形容詞等)と実体(名詞)との論理関係である(『文法』第2章参照)。

A2.2 古代人の感覚

1) 古代人の色彩感覚……基本4色と具体色

古代人の意識に立ち戻らなければ理解できないものの一つに色彩名がある。格について考えるヒントとして、古代人の色彩感覚についてみておきたい。

『時代別国語大辞典 上代編』の「あを〔青〕」の項によれば、

純粹に色を表わすことばは、赤・黒・白・青ぐらいで、(中略)その他の色名の大半は、顔料(植物)など具体物による比喩法によっている。

A2章 を格

という。そしてその「赤・黒・白・青」の4色は、

明(アカ)ー暗(クロ), 顕(シロ)ー漠(アヲ)という光の感覚に由来するものであるという。この4色はいわば体系をなしていたわけである。

この4色の中で特にアヲは、

黒と白との中間的性質を持つ範囲の広い色名で、おもに、青・緑・藍などを指し、ときには黒・白にも及びうるものであった。

という。古代人にとては「あを」は「漠」とした、中間的な色一般を指す色名であった。

古代人と現代人では、色彩を区分する基準が大きく異なっている。古代人の感覚では、光の感覚でとらえた基本4色がまずあって、そのほかに具体色があったわけである。現代人はこの4色を基本としてとらえる色彩感覚を喪失している。赤はレッドであり、黒・白・青はそれぞれブラック・ホワイト・ブルーと限定されている。現代人は光の波長の異なりを狭い範囲で区切り、その一区切りごとに名を与えており、ずっと分析的になっている。「青」はブルーであって、グリーンやグレーを含むものではない。「青」ライトがグリーンからブルー系へ変えられた信号機もあるほどで、分析的な現代人の感覚では、「青」がグリーンであることは許容できないのである。

現代人の色彩感覚で古代人の色彩感覚を直接理解することはできないわけである。

2) 古代人の格感覚……機能格詞3詞と意味格詞6詞

古代人の格表示についても同様のことが言える。「を」は目的格を表示するのが基本である、というような現代人の分析的な格表示感覚に固執していくは、古代人の格表示感覚が見えてこない。

古代・奈良時代においては現在の格詞のうちの2つのものがなかった。日本語の現在の格詞には「 θ_1 , が, を, に, へ, で, と, より, から, まで, θ_2 」の11のものがあるが、このうち「が」は、主格詞としては室町時代前後に使用されるようになったものであり、「で」は平安時代中期ごろまでに

A I 部 主格, を格

「に格」から生まれたものである。「へ」は、元来、移動性動作が話者のいる地点から遠く離れた目標へ向かうことを示す格だけを表すものであった（『文法』11.5, 6）。（「の」は格詞ではないく『文法』4.2 3）。 「から・まで」は要検討（『文法』36.9 ②）。

つまり、奈良時代には「が、で」の両格詞がなく（連体用法の「が」は「の」と同様、格詞ととらえない）、格詞「へ」はごく一部の格しか表さなかつた。格詞は「 θ_1 , を, に, へ(一部), と, より, から, まで, θ_2 」の9つであったと考えることができる。（「ゆ, ゆり, よ」もあったが、平安時代に「より」へと統一されて消滅したことを先取りして、ここでは対象外とする。）

この9つのうち「へ, と, より, から, まで, θ_2 」の6つの格詞の表すそれぞれの同名格（『文法』2.3, 11.5）は数が少なく、格詞としての限定度が高いので、意味と結びついている感がある。それでこの6つの格詞は「意味格詞」ととらえることができる（「 θ_2 」については『文法』2.7 参照）。

他の3つの格詞「 θ_1 , を, に」のうち「 θ_1 , を」は、後述するように、属性（動詞・形容詞等）と実体（名詞）との関係を機能ととらえた上で格表示する格詞なので、「機能格詞」と呼ぶのがふさわしい。「に」は意味格詞に近い性質もあるが、これら三者は、基幹体系を示すという意味で、色の古代基本4色にたとえることができる。

古代語格詞2分表

表A2-1

機能格詞	θ_1 , を / に	基本4色
意味格詞	へ, と, より, から, まで, θ_2	具体色

では、この機能格詞「 θ_1 , を」は、どのような感覚でとらえられていたのだろうか。属性のもつ基本イメージを手がかりに考えてみたい。

「に格」にある実体は必須実体とみえるものでも「準必須実体」であると考え、本章では扱いを保留する。本章では「を」に専念する。

A2.3 属性のもつ基本イメージ

1) 基本イメージ

属性(動詞・形容詞等)は基本イメージをもっている。日本語構造伝達文法では、特に「主格・を格」を扱う場合に、この「基本イメージ」が重要な意味をもつものと考えている。いくつかの基本イメージを例示する。

「食べる」という動詞の基本イメージは

[口のある生物] が [食物] を噛み碎いて体内に取り入れる
というものであろう。動詞の実際の使用においては、[] で示したものにあたる具体的な実体が準備される。……「妹がりんごを食べる」

「掘る」という動詞の基本イメージは3種類ある。

- ① [ある主体] が [地面など] に穴をあける……「人が地面を掘る」
- ② [ある主体] が地面などに [穴] をあける……「人が穴を掘る」
- ③ [ある主体] が地面などに穴をあけて [物] を取る
……「人が石炭を掘る」

このように複数の基本イメージがある場合、どのイメージで使用されるのかは、動詞の実際の使用の際にそのつど選択決定される。

「行く」という動詞の基本イメージは

[移動する能力のある主体] が [経路] に従い移動する(遠ざかる)
であろう。ここには「通る場所(経路)」が含まれている。単に移動する主体だけがイメージにあるのではなく、その経路も基本イメージの中に必須のものとして存在している。……「雁が空に行く」「旅人が道に行く」

2) 基本イメージ内にある実体は格表示を要せず

基本イメージ内にある実体は自ずと格関係が明らかなので、わざわざ格表示する必要はない。上の例で確かめてみたい。

「妹 りんご 食べる」

「人 地面 掘る」／「人 穴 掘る」／「人 石炭 掘る」

「雁 空 行く」／「旅人 道 行く」

ことさらに格表示はされなくても意味はきちんと伝えられる。

このような、ある属性の基本イメージ内にある実体を「必須実体」と呼ぶことになると、次のようなことが言える。

必須実体は1つの属性の基本イメージ内に1つないし2つ存在する。必須実体は格表示されなくとも格関係を伝えることができる。

なお、当文法では上例の「りんご・地面・穴・石炭・空・道」のような実体を「客体」と呼ぶが、この用語は目的格にある実体のことをいうではなく、主格以外の諸格に立つ実体をさしている(『文法』2.3参照)。

「買った」「書いた」など、なぜ、どう音便化？ → p. 42

一段動詞(「起きる→起きて」)はなぜ音便化しない？ → p. 45

「書く→書いた」なのに「行く→行いた」にならない？ → p. 50

サ行(「貸す→貸した」)はなぜ音便化しない？ → p. 51

「飲みたい」はなぜ音便化しない？ → p. 54

「なさいます」なのに「計います」はなぜダメ？ → p. 55

* * *

「あ、走ッタ」のタは開始を表す？ → p. 58

タは「開始」も「完了」も表す？ → p. 60

西日本方言で「雨降つとる」は、もうやんでる？ → p. 64

テは歴史的に領域が拡大(前進)した？ → p. 67

3) 基本イメージは主格主体をもつ

属性詞(動詞・形容詞等)は実際の使用に際して、その使用にふさわしい基本イメージを開示する。その開示される基本イメージの中には必ず1つの实体「必須実体」が存在している。それはその属性の主格主体(主語)であり、第1主格主体か第2主格主体かのいずれかである(第3主格は第2主格に準ずるものとする)。上例の「妹・人・雁・旅人」がそれにあたる。(現代語では、第1主格は「 \emptyset_1 」で表示され、第2主格は「が」で表示される。)

表A2-2「基本イメージの型と実体」には「基本イメージ型」の欄があるが、ここには属性の基本イメージのありうる4つの型が並べられている。

A型では第2主格主体のみが必須実体であり、

B型では第1(第2)主格主体と第2主格主体が必須実体であり、

C型では第1(第2)主格主体のみが必須実体であり、

D型では第1(第2)主格主体と必須客体が必須実体となっている。

基本イメージの型と実体

表 A2-2

基本イメージ 内・外	基本 イメージ型	実 体	格表示形態	
			古代語	現代語
基本イメージ内 ABCD 択一	A	必 須 实 体	第2主格主体	\emptyset , を が
			第1主格主体 (従属節中は 第2主格)	(第1主格→) \emptyset_1 (第2主格) ————— \emptyset , (を) が
			必須客体	\emptyset , を
	B C D	準 ・ 非 必 須 实 体	点位置格客体	に に, で
			意味格客体	へ・と・より・ から・まで・ \emptyset_2

A I 部 主格, を格

A型, B型, C型の基本イメージはいずれも1つないし2つの主格主体で構成されている。D型の基本イメージには必須客体が入っている。

基本イメージは、このA～Dのどれかの型をとる。そして、そのいずれの型にも主格主体が入っている。

4) 必須実体は「を」で表示されるようになった

「を」は元来感動詞であり、間投詞として文中に入ってきた。もともと格表示のあるところに入れば、その格表示の存在により、「を」は間投詞としての存在を保ったはずである。(以下、『万葉集』を「万葉」と記す。)

漁(アリ)する人と見ませ草枕旅行く人にわが名は告(ハ)らじ

〈漁をするただの海人だと見てください。旅のお方にわたしたちの名は明かせません〉 (万葉 9/1727)

現(ウツ)には逢うよしもなしぬばたまの夜の夢(イハ)にを継ぎて見えこそ

〈現実にはお逢いするてだてもありません。(ですから)夜の夢の中に
続けて(毎夜)見えてほしいのです。〉 (万葉 5/807)

この2例において、実詞(名詞)「人・夢」は格詞を伴い、それぞれ「と格・に格」にある。このような、格詞の後という位置では「を」は間投詞のままであり、格詞のように感じられるようになるということはなかった。

しかし、一方、もともと格表示のないところに間投詞として入った場合には、「感動」を伝えるものとしてよりは、徐々に対象をそれと「確認」するためのものとして感じられるようになり、あたかも格表示を担う形態であるかのような様相を呈するに至った。

乙女らを袖振る山の瑞垣(ミカキ)の久しき時ゆ思ひけり我は

〈乙女たちが袖を振る、その布留山の神垣のように、久しい間思って
きたよ。私は〉 (万葉 11/2415)

采女(ウメ)の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く

〈采女らの袖を吹き返した明日香風は、都が遠いので空しく吹いてい
る〉 (万葉 1/51)

A2章 を格

この「乙女ら・都」はそれぞれ「(袖)振る・遠み」という属性のもつ基本イメージの中では必須実体であり、主格にある。

また、次の歌では名詞「里」が動詞「忘る」のもつ基本イメージの必須実体であり、ここでは客格にある。

忘れ草我が紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため

〈忘れ草を私の紐につけておく。香具山の古い京を忘れるために〉

(万葉 3/334)

「乙女ら・都・里」は必須実体であるので、格表示は必要なかった。このようなもともと格表示のないところに「を」が入った場合に、「を」があたかも格を表示するかのような様相を呈するに至った。

ここで確認しておきたいことは、「を」で表されるものすべてが「必須実体」であるわけではないことである。すでに述べたように、「必須実体」以外のものの後にも「を」が入ったからである。1.1に示した「何をあわてて」の「を」も、やはり格を示すものではない。格は「に」のような原因を示すものであるだろう（「何にをあわてて」「何~~に~~にをあわてて」）。

5) ただし、第1主格主体は \emptyset_1 のまま

では、すべての必須実体に「を」がつくようになったのかというと、そうではなく、第1主格主体の場合は別であった。（第1主格主体は従属節ではなく、主文に現れる。『文法』2.2 参照。）

「第1主格」は格詞のないこと、「 \emptyset_1 」であること、格詞ゼロであることに意義があったので、「を」でさえ第1主格を表すための格詞のようになるということはなかった。

花 \emptyset_1 咲く。 山 \emptyset_1 高し。

という文の第1主格に「を」が付いて、次のようになることはなかった。

花 \emptyset_1 を咲く。 山 \emptyset_1 を高し。

「第1主格」は現在に至ってもなお、格詞はゼロ（ \emptyset_1 ）のままである。

6) 他の必須実体は「を」を受け入れる

他の必須実体は格表示を受け入れない積極的な理由はなかった。逆に「を」を受け入れることにより、文中の論理関係がより明瞭なものとして感じられるようになった。そして、この「を」使用による論理関係の明晰感は漢文訓読の方からも要請され、拍車がかかった。

7) それでは「を」は何を示すものとなったか

繰り返すが、「を」は目的語を示すものではない。「を」は、ある実体がその属性のもつ基本イメージ中の(第1主格主体を除く)必須実体であることを示している。その実体が必須実体であるという、その実体の構造上での機能を示している。これは「の」が意味をもたず、構造内の2実体を結ぶ機能を示しているのといくぶん似ている。(「の」はそれ自身が機能であるが、「を」は機能のありかを示している。)

第1主格主体を除く必須実体のとる格は、次節(A2.4)の2)～4)で述べるように、さまざまである。それで、しいて「を」が格を表すものと言おうとするならば、こう言わねばならないことになる……「を」は必須諸実体のとる「格群」を示すものである、と。「を」を格詞として扱う場合には、意味表示格詞ではなく、機能表示格詞としてとらえるのが適当である。

なお、「を」は結果として目的格を示すことが多くなったが、これは必須客体の多くが他動詞の目的語にあたるものだったからである。

◎「必須実体」は格が明白だったので、わざわざ格詞を用いてそれと表示する必要はなかった。が、第1主格主体以外は、徐々に「を」によって必須実体であることが明示されるようになった。その方が論理が明晰になるように感じられたからである。

◎「を」はその実体が必須実体であることを表示していたのであって、実体の「格」を表示していたわけではない。

A2.4 基本イメージの型

「を」を以上のようなものとしてとらえた上で、基本イメージのありうる型について確認しておきたい。基本イメージの型には、表A2-2にあるように、A B C Dの4種がある。ここではC型を先にとりあげて、次にA型、B型、D型の順に検討する。

1) 基本イメージC型……第1主格主体のみ

何かある属性が1つあれば、それに対する主格主体(主語)が存在するのは当然のことであり、わざわざ格詞を使用してそれと示す必要はない。現に、古代日本語において第1主格を示す格詞は存在していなかつたし、現在でも存在していない(『日本語構造伝達文法』2.2参照)。

たとえば、「走る」という動詞がある。この「走る」という動詞が実際に使用されるときには、そのイメージの中に何か走る主体が存在しているはずである。その主体は、具体的にはあるいは「犬」かもしれないし、あるいは「エリマキトカゲ」かもしれない。たとえそれが何であろうとも、ことさらに格詞を用いて第1主格にあることを示す必要はない。

犬 走る。 エリマキトカゲ 走る。

これで十分である。

この第1主格主体を示す格「第1主格」は音形式をもたないので \emptyset_1 (ゼロイチ)という記号で格表示することになっている。

犬 \emptyset_1 走る。 エリマキトカゲ \emptyset_1 走る。

C型の基本イメージはこの第1主格のみで構成される。主体について述べている。

2) 基本イメージA型……第2主格主体のみ

A型は、必須実体が1つで、それが第2主格主体である場合の型である。

第2主格というのは、第1主格と同位格の関係にある。第2主格は主体と属性の論理的設定順が同時である格、つまり話者が状況そのものに関心をも

A I 部　主格, を格

っている場合の主格であるため、出来事それ自体について述べる場合の主語を示し、眼前描写の際の主語や従属節中の主語にも適用される。

A型には下位区分として A-1, A-2, A-3 の3つの型がある。

[A-1]　主節内主格(事象主語)の例

をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をや立ちなむ
(女郎花の咲き乱れている野辺にもし宿をとったなら、理由もなく、
浮氣者との名が立ってしまうことであろう) (古今和歌集 229)

「(あだの)名」は「立つ」に対して主格主体(必須実体)である。ただし、第2主格であり、事象主格である。それで、第1主格とは異なり、「を」で表示されている(A2.3 5), 6)参照)。現代語なら「が」となるところである。

[A-2]　従属節(一般従属節)内主格の例

[夜並(ナガ)べて君を来ませ] とちはやぶる神の社を祈(ノ)まぬ日は無し
(幾夜も続けてあなたが来られるようにと神の社に祈らない日はな
い) (万葉 11/2660)

[命をしまたくしあらば] ありきぬのありて後にも逢はざらめやも
(命がさえ無事だったら、こんなに逢わないで恋し続けていったそ
の後も、逢わざじまいになっていいものか) (万葉 15/3741)

「君・命」は、(一般の)従属節内にある動詞の主体(必須実体)である。従属節内では、第1主格主体ではなく、第2主格主体であるので「を」で表示されている(A2.3 5), 6))。現代語では「が」となる。

[A-3]　従属節(「～(を)～み」従属節)内主格の例

パターンとしては「実詞(を)形容実詞+み」の形になる。意味は
(実詞) が (形容詞) ので
である。「を」が使用されるかどうかは、意味によらず、単に拍数に関わっ
ている。「を」があってもなくても意味は同じである。

◎ 「を」が使用されている場合

都を遠み…… 〈都が遠いので……〉 (万葉 1/51)

人目を繁み…… 〈人目が多いので……〉 (万葉 4/597)

◎ 「を」が使用されず、 \emptyset になっている場合

沖つ波辺波(ヘミ) \emptyset 静けみ…… (万葉 6/939)

〈沖の波(が)も岸辺の波(が)も静かなので……〉

谷 \emptyset 狹(セバ)み…… 〈谷が狭いので……〉 (万葉 12/3067)

「都・人目・沖つ波・辺波・谷」はそれぞれの形容属性に対して必須実体、主体となっている。従属節内主体なので A-2 と同様、第 2 主格にある。それで「を」で表示されている (A2.3.5), 6 参照)。

以上のように、また次の 3) で見るよう、第 2 主格の格詞は、 \emptyset ないし「を」によって表示されている(現代語では「が」によって表示される)。

第 1 主格が現代語・古代語を通じて θ_1 であるとの対照的に、古代語において第 2 主格に「を」が現れるということは、古代人においてすでに第 1 主格と第 2 主格とを区別する意識が働いていたものとみることができる。

なお、ちなみに言えば、従属節中の主語(第 2 主格)が目的語を表す格表示形態と同じ形態をとる現象はモンゴル語にもあり、これは古典語から現代語に至るまで一貫している(『蒙古語文語文法講義』pp. 40-41)。

3) 基本イメージB型……第 1 (第 2)主格主体と第 2 主格主体(帯感主体)

形容属性が感覚形容属性である場合には感覚主体と、帯感主体の 2 主体が生じ、複主体の構造となる(『文法』20.2)。

[紫のにほへる妹をにくくあらば] 人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

〈紫草のように美しく輝いているあなたが憎いのなら、(あなたが)人妻であるのに(どうして)私が恋い慕おうぞ〉 (万葉 1/21)

この歌では従属節の中に複主体の構造がある。したがって両主体とも第 2 主格主体であるが、感覚主体(発話者)は省略されるのがふつうである。帯感

主体は「妹」である。この帶感主体の置かれている第2主格を表す「を」は現代語では「が」になっている。

4) 基本イメージD型……第1(第2)主格主体と客体

D.1) D型では、第1ないし第2主格主体と客体がイメージ中の必須実体たとえば、ここに「射る」という動詞がある。この動詞の基本イメージには次の①～③のように3つのものがある。いずれの基本イメージの場合にも、一方の必須実体である主格主体には、「与一」という人間を設定する。もう一方の必須実体(客体)は次のようなものである。

①「射る」動作そのものをイメージする場合は「弓」がもう一つの必須実体である。

与一₀₁弓 射る

②「射る」を、飛んで行く矢とともにイメージする場合は「矢」がもう一つの必須実体となる。

与一₀₁矢 射る

③「射る」を、射る対象とともにイメージする場合はたとえば「的」が必須実体となる。

与一₀₁的 射る

同じ「射る」という一つの動詞ではあっても、基本イメージが異なれば、このように必須実体(客体)も異なる。が、ともかく基本イメージの中にある必須実体は、その動詞(の使用のされ方)と分かちがたく結びついており、その動詞があればその実体の存在がおのずと知れる道理のものである。それで、格詞でわざわざ格表示される必要はない。

なお、眼前描写・従属節形成の場合などには主体は第2主格主体になる。

D.2) 必須客体のとる格

では、「射る」に対して、「弓」「矢」「的」の諸実体はどのような格関係にあるのだろうか。

「弓 射る」の場合、「弓」は矢を飛ばす道具であるので、「弓」は動詞

「射る」に対して「道具を表す格」にあるはずである。「矢 射る」の場合、「矢」は力を受けて位置を変える実体であるので、「矢」はそのような「力を受けて位置を変える実体を表す格」にあるはずである。「的 射る」の場合、「的」は射るためあてという位置にあるので、「目標を表す格」にあるはずである。三者三様の格にある。

さまざまな格にあるが、基本イメージ内に存在する実体なので格は表示される必要がない。これが一律に「を」で表示されるようになった(A2.3 4)～6)参照)のだから、「を」は格を示していることにはならない。

必須客体はその他のさまざまな格にある。一例を示す。

父母を見れば尊し	(万葉 5/800)	感覚の対象
いにしへを思ほすらしも	(万葉 18/4099)	思考の対象
秋山の黄葉をかざし	(万葉 15/3707)	位置を与える対象
神の社を祈(ノ)まぬ日は無し	(万葉 11/2660)	祈願の対象
たらちねの母を別れて	(万葉 20/4348)	分離の対象
長き夜を寝む	(万葉 3/462)	持続の時間
空を月渡る見ゆ	(万葉 9/1701)	移動の空間
鄙の長道を恋ひ来れば	(万葉 15/3608)	移動(接近)の経路

基本イメージD型では、必須実体であるのは1つの主体と1つの客体である。客体はさまざまな格にあるが、一律に「を」で表示される。

5) 基本イメージは変化する

前節中の「たらちねの母を別れて」の「母を別れる」は現代語では「母と別れる」のように格が変化している。「別れる」という動詞の基本イメージが変わって、「母」が必須実体ではなく「動作等の相手」(A2.5 2)参照)とみなされるようになったからだと考えられる。(動詞 wak-ar- が wak-ar-e- となって態関係に変化が生じたことも検討する必要がある。)

ここに格をより分析的に表示しようとする意識が働いている可能性を見て取ることができる。現代人の色彩感覚が古代人のものではないように、格表

示感覚もより分析的になってきているのだろう。基本4色が基本色でなくなつたように、日本語の格表示は基本イメージに頼らない方向に向かっているのかもしれない。基本イメージの中に存在する論理的関係をより明確にとらえようとしているのかもしれない。

6) 基本イメージは重ねて使用できない……「を」は重複しない

A2.4 4)で、1つの動詞(射る)に対して複数のイメージが可能であることを見た。しかし、実際の使用に際しては、動詞は1つのイメージにおいてしか使用されない。

「射る」という動詞は、たとえば「的を射る」というふうに使用されるが、この場合、「射る」は射る対象とともにイメージされ、「的」が必須実体となる。「弓」や「矢」は補助的な存在(道具)となる(「的を弓で射る」「的を矢で射る」)。もし強引に「的を 弓を 矢を 射る」のように3つの実体すべてを必須実体として扱おうとすると、イメージが重なり合って混乱してしまい、文の焦点の拡散という形で意味が定まらなくなる。動詞はこの混乱を避けるために1つのイメージにおいてしか使用されないことになっている。

このように、動詞がそのつど使用できるのはそのうちの1つのイメージだけであるので、「を格」に立つ必須実体は1つに限られることとなる。つまり、「を」は重ねて使用されるということはないわけで、ここから「『を』は重複しない」という言い方が可能になる。

ただし、イメージの混乱を招かない場合には複数イメージの使用も可能である。

雨の中を(状況) 車を走らせる。

この例のように、「を」が状況を示すような場合には、他のイメージと共存していても、文の焦点が乱れて文意が定まらないということはない。(A2.3 4)末で述べたように、「を」で示されるものすべてが「必須実体」であるわけではない。状況を示す格(\emptyset_2 格)の場合も格詞を必要としなかつたので「を」が格を表すようにみえる結果となった。)

A2.5 準必須・非必須実体

属性の基本イメージには、表A2-2に見たように、1つないし2つの必須実体が含まれている。

ところで、属性は、実際の使用において、基本イメージにない実体を取り込むことが多い。ここに取り込まれる、そのような実体を「準必須実体」「非必須実体」と呼ぶこととする(表A2-2参照)。この両者についての考察は改めて行うことにする。

準必須実体、非必須実体は基本イメージの中にはないので、通常、格詞によって格を示されなければ正確には理解されない。

1) 「点位置格」……「に格」

「準必須実体」、「非必須実体」には、その属性の示す事態が成立する「点位置」を表す客体がある。これらの客体のとる格は「点位置格」である。

ここで「点位置」というのは「空間的」な点位置ばかりでなく「時間的・論理的」な点位置をも含む、広い意味での点位置のことである。この「点位置」を表す客体を「事態成立点位置表示客体」と呼ぶことにしたい。しかし、これでは長いので、「点位置格客体」でもよいだろう。

「点位置格客体」の立つ「点位置格」は格詞「に」によって表示される。

『岩波古語辞典』は「に」の最も基本的な意味を

存在し、動作し、作用する場所を「そこ」と明確に指定する
ものとし、したがって「に」は

- ①場所 ②時間 ③心理的位置 ④帰着点
- ⑤目標・目的・原因・結果 ⑥対象 ⑦受身・使役の対象
- ⑧動作の状態 ⑨動作の資格 ⑩比較の起点・基準

等、動かない一点を指定する、という。さらに、「に」が省略されることは極めて少なかったという。

「に」は準必須実体・非必須実体のとる格ではあるが、実体が「点位置」にあることを表し、意味よりは機能表示に重点を置いている格であるので、

A I 部　主格, を格

「に」も「主格・を格」同様、機能格として扱うのが適当であるだろう（表A2-1）。

なお、「に」は「にて」という形式を介して「で」という格を生んだ（『文法』11.5に構造の変化を図示している）。

2) 意味格

「非必須実体」の立つ格には格表示形式そのものが意味をもっているかのように見えるものがある。「へ・と・より・から・まで・θ₂」の格である。

へ……帰着点・方向・場所

と₁……(発話・思考・引用・意図・結果の)内容

と₂……動作等の共同者・相手

より……(時間・空間・論理的・物質的)起点・経由点, 比較の基準

から……(時間・空間・論理的・物質的)起点・経由点

まで……継続事態の時間・空間的帰着点

θ₂……頻度・状況・(現在と関係づけられた)時(『文法』2.7)

以上は意味格としてとらえるのが適当であるだろう。

A2.6 章のおわりに

「を」は他動詞の目的語を示すものなのに、なぜ自動詞にも使用されるのか……このような疑問があった。しかし、このような疑問は、設問そのものの中に誤りがあったわけである。「を」が他動詞の目的語を示す、と考えるのはちょうど「青」が「ブルー」を表すと考えるのと同じで、ここには現代人の分析的な意識が色濃く反映している。

「を」を考えるには、属性の基本イメージのあり方を考える必要があったのである。おそらく古代人は、分析的で抽象的な(したがって、事態の論理関係をそのつど解釈・構成する)感覚をもつ現代人よりは、より具象的で総合的なイメージとともに言語を使用していたのではないだろうか。